地域づくり表彰

水没林（すいぼつりん）ワーキング
（山形県飯豊町 いいでまち）

絶景・白川湖の水没林を守り稼ぐ持続可能な地域づくり

水没林ワーキング
事務局
菊川　哲彦



１．飯豊町（いいでまち）について

山形県南部に位置する飯豊町（いいでまち）は、人口約6,000人、町の面積の約 84%を豊かな森林が占める日本有数の豪雪地帯です。日本百名山「飯豊山（いいでさん）」の麓に位置し、町の基幹産業である農業では、山形県を代表するブランド米「つや姫」や「雪若丸」のほか、名産「米沢牛（よねざわぎゅう）」の県内生産量の約 4 割を担うなど、「飯（めし）が豊かなまち」として知られています。

また､広大な水田の中に屋敷林(やしきりん）で囲まれた家々が点在する「田園散居集落（でんえんさんきょしゅうらく）」という日本の原風景を守り続けており､「日本で最も美しい村」連合の創設メンバーとしても活動しています。一方で、町全域が過疎地域や特別豪雪地帯に指定されており、急速な人口減少や少子高齢化、観光施設の老朽化など、中山間地域特有の深刻な課題にも直面しています。



町の象徴「田園散居集落」景観

２．活動開始の背景・経緯

町の山間部に位置する「白川（しらかわ）ダム湖（白川湖）」では、春の約2か月間限定で、満水となった湖面からシロヤナギの木々が生えているかのように浮かび上がる神秘的な絶景「白川湖の水没林」が出現します。

この奇跡の絶景が生まれる背景には、厳しい自然と人間の暮らしが織りなす感動的なストーリーがあります。冬の間、日本有数の豪雪地帯である飯豊連峰に降り積もった膨大な雪が、春の訪れとともに清らかな「雪解け水」となって一気に川へと流れ込みます。下流の町を洪水から守る白川ダムがその水を受け止めることで湖面がぐんぐん上昇し、春のほんのひとときだけ、湖底のシロヤナギの森を優しく包み込みます。そして5月中旬、下流の広大な田園散居集落で田植えが始まると、水は「命の水」として一気に田んぼへ向けて放流され、湖面が下がって再び元の緑の陸地（森）へと戻っていくのです。

もともと地元住民にとっては見慣れた「春の風物詩」に過ぎませんでしたが、近年の SNS ブームをきっかけに､「春の映え観光スポット」として全国・世界から注目を集めることとなりました。



幻想的な空間が広がる「水没林カヌーツアー」

しかし、コロナ前には静かだった山村にゴールデンウィーク（GW）前後だけで5万人を超える観光客が集中したことで、最長3.5㎞にも及ぶ深刻な交通渋滞が発生｡「家から車が出せない」「農作業に向かえない」といった地域住民の生活への大きな支障や、ゴミのポイ捨てなどの問題が頻発しました。さらに、来訪者の多くが「写真を撮って1時間ほどで帰ってしまう」通過型の観光だったため、地域にお金が落とされず、住民にとっては「混雑と不便だけが残る困りごと」となっていました。

「このままでは美しい自然も住民の暮らしも壊れてしまう。水没林を一過性のブームで終わらせず、地域みんなを豊かにする宝に変えよう」??この強い決意のもと､2023年に活動がスタートしました。町の担当課が呼びかけ役となり、観光協会、アクティビティ事業者（いいでカヌークラブ)､地元の第三セクター(白川荘)､住民自治組織（中津川むらづくり協議会)､若手森林整備団体（中津川の森人会）などがひとつに集まり、官民･住民が一体となった協力体制「水没林ワーキング」が誕生しました。

３．主な活動や成果

「水没林ワーキング」では、行政や事業者の垣根を取り払い、毎月1回集まって課題の解決策をスピーディーに決めて実行する「素早い決断と実行のチームワーク」を確立しました。事前に地域住民への説明会を開いて丁寧な対話を重ねるほか、安全な湖上利用のために警察・消防・ダム管理事務所とも連携した「白川湖パドルスポーツ協議会」を立ち上げ、誰もが安心して楽しめるルール作りを行いました。

主な取り組みと成果は以下の通りです。

（1）自分たちで管理費用をまかなう仕組みづくりと渋滞の解消

町のお金だけに頼らず、持続的に環境を守るため、駐車場での「駐車協力金（乗用車1,000円）」をスタートしました。集まった資金は、交通誘導員の配置、仮設トイレの設置、清掃活動、駅から現地を結ぶシャトル

バス運行等に充てることで、行政の負担に頼らず可能な限り自分たちで管理費用をまかなう仕組みを作りました。また、WEB でのリアルタイム混雑状況の発信や予約制の導入により、最長 3.5km あった渋滞を約 600m まで大幅に減らすことに成功しました。

(2)「白の水没林」と「ライトアップ」のブランディングによる需要分散と滞在拡大

需要を GW の一時期だけに集中させないため、新たな魅力の打ち出し（ブランディング）に取り組みました。一つ目は、これまで見頃とされていなかった芽吹き前の「白の水没林（3 月下旬～4 月中旬）」の価値化です。残雪の湖岸、氷がうかぶ白とアイスブルーの湖面から芽吹き前の静かなシロヤナギが立ち上がる凛とした魅力を「まだ誰も知らない絶景」として発信。新緑の時期だけとしていた「見頃の期間」を従来の 1 か月から「2 か月間」へと広げ、訪れる時期の分散と需要の拡大に取り組んでいます。



アイスブルーが美しい白の水没林

二つ目は、夜の魅力を創出する「水没林ライトアップ」です。GW も混雑するのは日中時間帯だけです。夕方から夜にかけての来訪者は混雑緩和と消費拡大につながります。夜の静けさを乱さないよう、ガソリン発電機を使わずポータブル電源による静音なエコライトアップを実施。さらに、夜のチル（リラックス）空間「水没林 BAR」のオープンや、水没林の景観保全や水資源の環境保全のために実施している水没林フィールド整備で発生する間伐材を使った「水没林サウナ」を組み合わせることで、「日帰りで帰る場所」から「夜まで過ごし、泊まって楽しむ場所」へと大きな意識改革を起こしつつあります。



宿泊需要拡大 ライトアップ

(3) 地域ルールを整えた湖面活用（オープン化）と体験型コンテンツの充実

国土交通省との協議を重ね、「河川空間のオープン化」を実現しました。これにより、国・町・地域が承認した事業者のみ、安全や環境保全など適切なルールのもとでの営業活動が可能となりました。看板事業である「水没林カヌーツアー（1 回 8,000 円?）」は年間約 5,000 人が訪れる大人気体験コンテンツへと成長。さらに、早朝の気球フライトや地元カメラマンと巡るフォトツアーなど、高単価で魅力的な体験商品を次々と生み出しています。

(4)「雪解け水の循環」ストーリーの発信と地域への広がり

飯豊連峰の雪解け水が水没林をつくり、それが下流の水田を潤してお米や日本酒（ゼロカーボン日本酒「永遠酔」など）を育むという「命と食の循環ストーリー」を発信。観光をきっかけに地元の農業や特産品への関心を高める取り組みを進めました。

(5) 関係人口の創出と地元の誇り（シビックプライド）の醸成

GW の繁忙期の混雑対策については、「おてつたび」を活用し全国から業務の担い手受け入れるとともに、地域のファンを増やしました。また、地元の親子向けには「水没林ネイチャーカヌー体験教室」を開催し、子供たちはもちろん、親世代に対しても水没林という地域の宝に誇りを持ってもらうための取り組みを進めています。

(6) 主な成果

シーズン中の入込客数は 5 万 4 千人に達し、地域に数億円規模の経済効果をもたらしました。Instagram のフォロワーは 1 万人を超え、山形県初の「日本版持続可能な観光ガイドライン(JSTS-D)」ロゴマーク取得や、JR 東日本の東北プロモーションである「TOHOKU RelaX」の対象地への選出、米『ナショナル ジオグラフィック』誌 BEST of 2026 選出、「スポーツ文化ツーリズムアワード 2024」受賞など国際的・全国的に高く評価され、住民の「困りごと」から「誇り」の源に変わりつつあります。

４．課題と今後の展望

GW の激しい渋滞や環境への負荷は改善されつつありますが、年々深刻になる担い手の問題、春以外の季節（特に冬や平日）の集客や、泊まってゆっくり過ごすための宿泊施設の不足が今後の課題です。

そのためにも、一緒になって水没林を守り育てる仲間の形成は重要です。今年から水没林フィールド整備はワーキングメンバーのみならず、共感してくれる一般の方にも参加をいただき、関係人口化を目指します。

また、休館中となっている白川湖岸の宿泊施設「フォレストいいで」について、民間の力を活用して上質な滞在拠点へと生まれ変わらせる「飯豊・白川流域まるごと構想」の検討を進めます。あわせて、田園散居集落の空き家を生かした古民家ホテルやオーナー制度を展開し、観光と農業が互いに支え合う町づくりを目指すことで、春以外の集客にもつなげていきたい考えです。

さらに、国連世界観光機関（UN Tourism）が認定する「ベスト・ツーリズム・ビレッジ（BTV）」の取得を目指し、地域住民・事業者・訪れる観光客の誰もが幸せになれる「持続可能な地域づくり」のモデルとして、歩みを止めることなく挑戦を続けてまいります。



「水没林フィールド整備」の風景